

どんどん書き込みながら本を読もう(マージナリアのすすめ)

— Reading with a pencil —

開倫塾

塾長 林明夫

はじめに、開倫塾の塾長の林明夫です。おはようございます。今日も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

1. (1)一昨日、菅首相の記者会見で、東京都などに出されていた緊急事態宣言は6月20日(日)に解除になり、あとは7月11日まで蔓延防止対策を講ずるとのことです。

緊急事態宣言は解除されても、コロナ禍は終わったわけではありませんので、万全の感染予防対策を講じた上で、粛々と仕事や社会生活、ご家庭などでの生活にあたっていただきたく存じます。

- (2)「読書をする際には著者・作者との対話、時空を超えた対話」をしたらよいとよく言われます。今日6月19日(土)の開倫塾の時間では、具体的にどのように「著者との対話」をしたらよいかを皆様とご一緒に考えたく思います。

- (3)その一つに、本を読むときは鉛筆や筆記用具を手に持ち、線を引いたり、四方を線で囲んだり、読んでいて思い、考えたことを自由自在に書き込み、筆者との対話を進めることをお勧めいたします。「余白や欄外の書き込み」を英語で marginalia(マージナリア)というそうです。

2. (1)作家の阿刀田(あとうだ)高先生は、「紙の本・新聞は人間をつくる」という講演で、「読書は人それぞれ、何でもいい。暢気(のんき)に読んで、面白いなあと思うのも大事。ただ、読書で一番大切なのは、書き手と話し合っ



て対話をするのです。つまり、本の著者がなぜこのテーマに挑戦しようと思ったのか、そして、まずどこから手をつけ、どんなところで困難にぶつかり、それをどう解決して、結局どのように辿り着いたのか…。」

- (2)「私は教育者ではないので、そんなに若い人と接することはありませんが、3人ほど若い人に、新書本ぐらいのボリュームの本で一度マージナリア(書き込み)をやってみたらと勧めてみました。挑戦した人はよい結果を得ているようですが、自分の好きな本、サッカーの入門書とか何でもいい、自分が一番好きだと思える本を読みながら、少し著者と対話をしてみたらどうでしょうか。まさに読書の一番大事なことで、自分と意見が違う、ここは同じだ、なるほどこんな風に考える人がいるのか…ということが見えてくるのです。

- (3)新聞を読むのも、このマージナリアのような部分もあると思います。

*以上、阿刀田高著「紙の本・新聞は人間をつくる」、文字・活字文化推進機構「活字の学びを考える懇談会」リレー講演2021年5月24日刊より引用。



3. (1)作家の Austin Kleon 氏は、自身の web サイト

(<https://austinkleon.com/2018/08/30/reading-with-a-pencil/>)で「『書き込みながら本を読む』という行為は、ただ読むだけよりも深い読書体験につながり、さらには作家になるための重要なステップにつながる」と述べています。

(2)作家になるためのファースト・ステップは読者になることです。次のステップは、鉛筆を握りしめながら本を読むことが重要になる。ノートにメモを取るのではなく、アンダーラインを引いたり、丸で囲んだり、読んでいるときに感じたことを走り書きして空きスペースで論じたりすることで、読み手と書き手の中間地点を十分に楽しむことができる。

(3) Reading with a pencil. Thursday, August 30, 2018

① The intellectual is, quite simply, a human being who has a pencil in his or her hand when reading a book.—George Steiner

② I believe that the first step towards becoming a writer is becoming a reader, but the next step is becoming a reader with a pencil. When you underline and circle and jot down your questions and argue in the margins, you're existing in this interesting middle ground between reader and writer:

③

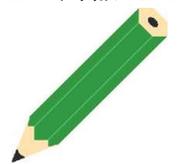


4. (1)例えば、私は NHKTV の大河ドラマ「晴天を衝け」の主人公、渋沢栄一が大好きなので、番組の進行に合わせて、渋沢栄一自伝「雨夜譚(あまよがたり)」と幸田露伴作「渋沢栄一伝」どちらも岩波文庫(岩波書店刊)を読んでいます。

(2)読む際には「B か 2B の鉛筆」を 1 本持ち、年号が出てきたら西暦に直し、上の欄外に記入、はじめて登場する人名や地名、重要事項は四角や丸で囲み、また、傍線を引いています。

(3)作者の大切な「思い」や「考え」には「 」(かぎかっこ)をつけ、大切な語句には傍線を引き、また、四角や丸で囲んでいます。

*感じたこと・共感することがあれば、欄外に書き記しています。これが作者との対話になるか否か、少し疑問ですが、漫然と文字を追っているだけの「読書」よりは力が入っていますので、印をつけたところを中心に何回か読み返すと、作者の考えが理解できるような気がします。



5. 今回ご紹介した鉛筆を持ち「書き込みながら本を読みすすめる(Reading with a pencil)」「マージナリア」によって、「著者・作者との時空を超えた対話」が少しでもできればと考え、ご紹介させていただきました。これぞという本を読む際には、是非、ご挑戦ください。

但し、この「Reading with a pencil」「Marginalia」「書き込みながら本を読む」ことが許されるのは自己所有、自分の本だけですので念のため。図書館の本や友人・知人から借りた本は、「読む前によく手を洗って読むこと」「書き込みは絶対禁止」です。是非、お守りください。

